

秋の叙勲・褒章



平成23年秋の叙勲・褒章が11月3日に発表されました。能登町からは地方自治、消防、公共福祉、杜氏、畜産の各分野で、その進展に長年尽くしてきた5人(叙勲2人、褒章3人)が栄えある受章を受けました。

5人の功績と心境をお伝えします。

黄綬褒章

中 三郎さん(74) = 越坂

「蔵人をはじめ、周囲の皆さんのご指導のおかげだと思っています」と受章の喜びを語る中さん。20歳で酒造りの世界へ飛び込み、54年間その最前線に立ち続けています。その間、全国新酒鑑評会で11年連続金賞を受賞するなど、その名は全国に響き渡っています。「うまい酒を造って、消費者に楽しんでもらうことが杜氏の仕事。そのために考えた結果が『山廃仕込』でした」と話す中さん。日本酒の味を追求し、「天狗舞」を山廃仕込の代名詞と呼ばれるまでに育てました。「後継者を育てる前に探ることが大変。いかに酒造りに人を呼び込むかが杜氏組合の課題であるし、今後の私の仕事」と力を込めます。



黄綬褒章

中瀬晴夫さん(61) = 上町

能登牛の生産農家として、40年以上和牛生産に従事してきた中瀬さん。繁殖農家が減少する中、能登和牛改良組合長として、生産者の中心的役割を担い、品種改良に尽力しています。「能登牛の質を上げるためには、生産者同士が気づいたことや心配なことなど情報を共有することが大切」と話します。

2007年には「和牛の祭典」とも呼ばれる全国和牛能力共進会に中瀬さん所有の牛が出場。「来年の共進会では前回以上の成績を残したい」と意気込みます。繁殖農家としてのやりがいを「肥育農家に評価され、喜ばれること」と話す中瀬さん。「県が掲げる能登牛1千頭計画にも協力していきたい」と意欲を見せます。



旭日双光章

山崎元英さん(71) = 小木

「私を忍耐強く支えてくれた人のおかげです」と受章の喜びを語る山崎さん。旧内浦町、能登町の町議会議員を40年にわたって務めました。その間、議長や常任委員会委員長などを歴任。地方自治の育成と発展に尽力してきました。

40年間の議員活動を振り返り「昭和63年に内浦町で開催された全国自然公園大会で現在の天皇・皇后両陛下が『自然を子々孫々まで残していかなければならない』とお話しされたことが一番印象に残っています」と目を細めます。

今後については「できるだけ人に迷惑をかけないように、自分の人生を楽しみたい。微々たる力しかありませんが、町政にも協力していきたい」と話しました。



藍綬褒章

室峰常弘さん(73) = 宇出津

20年以上、保護司として犯罪や非行を犯した人の更生を支えてきた室峰さん。「保護司全体に対するご褒美だと思っています」と受章の喜びを語ります。「更正されることを信じて、公正、誠実に向き合ってきました。更正して、それぞれの分野で仕事に打ち込んでいる姿を見るのが一番うれしい」とその活動を振り返ります。長年、教員をしながら保護司の活動を続けてきた室峰さんは、子どもたちや対象者へ「人間としての正義感を確立すること」の大切さを伝えてきました。

現在は奥能登地区の保護司会会長。「53人の保護司が、それぞれの地域で学校と連携しながら、非行防止の啓発に努めていきたい」と力を込めます。



瑞宝双光章

山本 勉さん(70) = 久田

消防団員として47年間、地域防災の向上に努めてきた山本さん。「消防団員や関係各位の協力と家族の支えがあったから」と受章の喜びを語ります。山本さんは、旧柳田村、能登町の消防団長として12年間、災害や火災発生時に陣頭指揮を執ってきました。「災害現場では、2次被害を防ぐために団員の安全確保が第一」と団長時代を振り返ります。「一番の思い出は全国消防操法大会での優勝。消防団長として、めったにできない経験をさせてもらいました」とほほ笑む。

「これからも消防団を応援していきたい。一朝有事の際には町民の生命財産を守るため、一生懸命頑張ってもらいたい」とエールを送ります。



真脇遺跡体験館で干し柿作り
甘い干し柿の完成まで約1カ月

昔ながらのお菓子作りに親んでもらおうと、真脇遺跡体験館が毎年実施している干し柿作り体験。10月26日、今年も真脇小学校全校児童26人が挑戦しました。

児童たちは、丁寧に渋柿の皮をむき、一つ一つ結んでいきました。出来上がった児童から体験館の軒下につるして完成。約1カ月で渋み成分「タンニン」が凝縮し甘い干し柿になります。作業終了後、児童を代表して田中俊嗣君（6年）が「6回目なのでうまくできました。おいしい干し柿になってほしいです」と世話をしてくれた職員にお礼を述べました。



軒下に干す作業を見守る児童ら

大鏡餅を披露する小垣の「おやっさま」



鶴川のいどり祭り
餅をいどって今年を笑い飛ばす

県指定無形民俗文化財「鶴川のいどり祭り」は11月7日、鶴川菅原神社で行われました。「いどり」は、悪口を言うなどの意味で、日本三大悪口祭りに数えられています。正式には八講祭と呼び、11月1日から8日まで行われる新嘗祭の一つです。今年の当番が作った直径約1.2mの大鏡餅が中央に運ばれると、その餅を持ち帰る来年の当番が持ち上げて披露します。早速「反り返っている」「光が透けて見える」などといどり合い、周囲は笑いに包まれていました。最後は神主が仲裁し、無事来年の当番に引き継がれました。

北東アジア学生フォーラム「能登町セッション」
能登町で日本とロシアの学生が交流

10月31日から3日間、北東アジア学生フォーラム「能登町セッション」が開催され、能登町と包括的協定を結ぶ東海大学とロシア・ウラジオストク市の極東連邦大学の学生ら30人が、環日本海地域の平和や発展について議論しました。31日は、学習院大の上田隆穂教授、極東連邦大のアレクセイ・パブロフ教授、東海大の藤巻裕之専任講師が講演。翌1日には小木にある「ソビエト戦士の碑」を訪れ、約100年前にこの地に流れ着いたロシア人兵士の冥福を祈りました。



▲環日本海地域活性化に向けて、4カ国の大学構想や公益カジノ船就航などの教育・ビジネス交流モデルについて講演する学習院大・上田教授



◀ロシアの学生と東海大の学生が両国友好の証しとして一緒に献花しました

まちの出来事

しおサミットin能登
塩に対する正しい知識で健康に

『塩』について考える「しおサミット」が11月19日と20日の両日、能登町を主会場に開催され、全国各地から約80人が参加しました。19日に能都庁舎で行われた講演会では、国産こだわり海水塩の会会長の村上譲顕さんが「日本人には塩が足りない!」と題して講演。村上さんは塩がいかに大切なものか、誤解されているかを説明しながら「塩は量ではなく質が大切。ミネラルバランスの良い塩をとりましょう」と呼び掛けました。20日は能登各地の製塩施設を巡り、昔ながらの伝統製塩や深層水の製塩施設などを見学しました。



塩に対する理解を呼び掛ける村上さん

久田船長碑の前で厳かに神事が行われました



第109回久田船長前祭
久田船長の勇気ある行動を顕彰

109回目を数える久田佐助船長の碑前祭が10月28日、鶴川菅原神社横で行われました。式典には鶴川小学校5・6年生や鶴川中学校1年生、地元住民らが参列。郷土が生んだ英雄の冥福を祈りました。

明治36年10月29日、青函連絡船「東海丸」の船長として、100人あまりの乗員乗客の命を救い殉職した久田船長。その勇気ある行動が今に語り継がれ、毎年命日である10月29日に碑前祭が営まれています。厳かな神事のあと、小学校5年生による国定教科書の朗読や唱歌の合唱などが行われました。

東海大学海洋学部長の加藤登教授が講演
食の視点で日本の長寿を分析

東海大学の海洋学部長・加藤登教授の講演会は10月22日、宇出津の興能信用金庫本店で行われました。

水産食品化学と食品衛生管理が専門の加藤教授は、日本では昔から魚介類の保存に塩を使っていた例を挙げ、「近年は冷蔵庫の発達で生活習慣病予防になる減塩が進んだ」と分析。食の保存方法の変化にも長寿の一因があるのではとの考えを紹介しました。

講演会は能登町地域活性化推進協議会などの主催で、漁業関係者や商工会関係者ら約30人が熱心に聞き入りました。



専門の水産加工品について講演する加藤教授

持木町長から表彰を受ける東崎さん



能登空港利用促進ポスターコンクール
年に一度は家族で能登空港へ

能登空港利用促進能登町協議会が募集した、能登空港の利用促進ポスターコンクールの表彰式が11月4日、能都庁舎で行われました。最優秀賞に選ばれた東崎涉さん（能都中1年）、優秀賞の橋本文明さん（同1年）、佳作の高田知齊さん（同3年）の3人に、持木町長から表彰状が贈られました。

持木町長は「能登空港は開港9年目を迎えました。不況や震災などの影響で厳しい状況ですが、皆さんのポスターを活用してPRしていきたい」と話しました。作品は11月11日まで能都庁舎1階ロビーで展示されました。